

世界の視点から見た四国遍路の魅力：西洋人遍路を例として

モートン常慈（徳島文理大学講師）

The allure of the Shikoku pilgrimage route as viewed from around the world: An example of Western pilgrims

David C. MORETON

Lecturer, Tokushima Bunri University

Recently the numbers of non-Japanese making the Shikoku pilgrimage has increased dramatically. Yet despite four previous studies on the globalization of this pilgrimage route there has not been a comprehensive analysis on the numbers, motives, overall comments and concerns of people coming to Shikoku from around the world. This paper utilizes data from a wide variety of sources and presents a vivid picture of their present state. At first, I describe the four studies that have been conducted thus far, then present up-to-date statistical data such the number of foreigners coming, the gender ratio, their motives and reasons for making the pilgrimage and their overall comments. I also examine the 100-year history of non-Japanese and the Shikoku pilgrimage and describe what early Western pilgrims, such as Frederick Starr, Alfred Bohner, Oliver Statler, thought about this pilgrimage route in the 20th century. Then I demonstrate how this journey has been described in various tourist brochures published between the 1930s and 1950s, and then conclude that are there four items that people from around the world today are seeking. These are: 1. to experience Japanese history and/or culture, 2. to walk long-distance, 3. a desire for an adventure or challenge and 4. to experience a place off the beaten track. It is evident that the only place where all four can be obtained in Japan is the Shikoku pilgrimage route and this is what makes it so alluring. However, with the increasing amount of foreigners coming alone or as groups in "pilgrimage tours" there is some concern as to what might happen to the Shikoku pilgrimage route in the future.

はじめに

2015年の秋、あるオランダ人夫婦が6回目の四国遍路をした。彼ら曰く、「今回は以前よりも多くの外国人遍路に会う。4、5日しか歩いていないが、外国人遍路と会わない日はない。この間に会ったのは13名で、またそれ以外の人も見かけた。2010年から2014年までの間は、(外国人遍路は)徐々に増えている感じだが、今年は爆発的に増えたと実感した。」¹ 別の外国人が2015年10月に3回目の遍路に出て、26日目に「23人の外国人遍路に会った。以前にはこれほどの人はいなかった」と言う²。どうして、最近、外国人の間で四国遍路への関心が高まってきたのだろうか。世界の視点から見て四国遍路の魅力は何だろうか。本稿では、外国人、特に西洋人を例として、彼らにとっての四国遍路の魅力、実態（人数、国別、男女の比率、動機など）や問題点を考察する。これまでにも、こうしたテーマについての研究はいくつかみられるが、データが少なく、外国人と四国遍路の歴史についての細かい分析も行われていない。したがって、本稿は最近の外国人遍路ブームに関して大変参考になるであろう。

これまでの外国人遍路についての研究

初めての研究プロジェクトは、徳島在住（当時）のフィオナ・マグレガーによるものである。彼女は、

¹ メール : Mels Boom.

2015年10月6日

² インタビュー : Elly Juhrend. 2015年12月13日。

2000年の3月－4月と2001年の2月－3月に日本人と外国人遍路にアンケートを記入してもらい、その結果を2002年1月に「四国遍路における日本人と西洋人遍路の比較」という修士論文で発表した。彼女は161人の日本人と15人の外国人遍路から様々な回答を得たが、ここでは、西洋人の回答だけを取り上げたい。年齢は20代が4人、30代が3人、40代が6人、50代が2人。性別は12人が男性、3人が女性。国別はアメリカ（10人）とオーストラリア、ベルギー、カナダ、オランダ、スイスだった。宗教は様々。四国遍路をする動機は、自然やハイキングが好き、人々との交流をしたい、巡礼について学びたい、様々なことに対して「ありがとう」を伝えるため、研究のため、修行のため、日本での違った経験をしたい、日本の伝統文化を味わうため、弘法大師に関心があったため、など。また、総合的な感想は、「言葉で表すことが難しい」、「人生でもっとも強烈な経験の一つ」、「今まで一番辛かったこと」、「人生を変えた旅、アドベンチャー」などがあった。

次は、2005年に著者が「外国人の目から見た（四国）遍路」という論文に、外国人の人数、国別、四国遍路の情報源、遍路の魅力、四国遍路についての感想をまとめた。人数や国別のデータは香川県にあるおへんろ交流サロンからのもので、そこを訪れた人数は、平成14－15年は30人、15－16年は62人、16－17年は40人だったことが分かった。また、そこにある「国際納札箱」に入れられていた35枚の納札を国別に分けた。その結果は、国数は6か国で、アメリカが12枚、カナダが7枚、韓国と中国が3枚、イギリスとインドネシアが2枚だった。また、当時行った聞き取り調査によると、西洋人にとっての四国遍路の魅力は3つで、自由さ、お接待（文化）、とコストだった。そして、感想としては、次のようなものがあった。「四国遍路の経験すべてがとても良かった」、「私の巡礼は冒険がいっぱい、人生を変える経験だった」、「言葉で表せない驚嘆な経験だった」、「外国人遍路が少ないのにびっくりした」、「四国霊場の歴史、文化などを説明するもっと良いガイドブックが欲しい」³。また、四国遍路をもっと宣伝した方が良いとの質問については、「Yes」は6人、「No」は7人、未定または両方は3人だった。

その後5年後、早稲田大学の社会学教員が外国人遍路の実態を調べた。彼らは2010年度から2012年度の3年間に、現代巡礼の変容を研究した。その一つの方法が、外国人や日本人遍路に対する量的調査で、2011年5月から2012年1月の間、189人の日本人遍路と29人の外国人遍路のデータを集めた。それによると、外国人遍路の場合、国籍は欧米諸国が多く、女性外国人遍路は4割、年齢は若年層、学歴は高く、宗教保持者が多く、日本在住者は1割であった。「歩き遍路」は約2割、無料宿泊率が高く、また6割は「友人・知人」、3割はインターネットから四国遍路を知った。そして、四国遍路の世界遺産化運動に関しては、7割の外国人遍路が賛同した。

そして、2012年に浅川泰宏氏は、「遍路姿の外国人を見かけることも増えてきた」と述べ、どのくらいの外国人遍路が来ているかを把握するため、徳島南部にある「牟岐町お接待の会」の「訪問台帳」を調べた。2001年3月から2012年5月の分を調べた結果、244件は外国人遍路だと分かった。それをさらに分析すると、次のことが明らかになった。欧州・北米が圧倒的に多い、2008年の人数は2001年の8倍だが、その後減少する、若年層が多い（20代－40代が6割）。参考のため、2014年に著者が「お接待の会」の出口会長から、接待所牟岐に立ち寄った遍路数と外国人数のデータを頂いたので、ここでその年間数字を述べると、2002年-9人；2003年-12人；2004年-7人；2005年-18人；2006年-16人；2007年-23人；2008年-34人；2009年-36人；2010年-75人；2011年-27人；2012年-23人；2013年-17人；2014年-10人。2010年がピークで、その後、かなり減ったことが分かる。⁴

現代外国人遍路の実態

ここで、人数、国別、男女比率、年代別、四国遍路を知った経緯、四国遍路の動機などを述べる。その情報源は、著者が2005年から行っている聞き取り調査（メールか実際に会ったときの回答）、1番札所の前にある「門前一番街」という遍路用品店、6番札所安楽寺、13番札所大日寺、香川県のおへんろ交流サロンや仁庵接待所、そして英語版のガイドブックの販売歴などである。しかし、マグレガ一氏や早稲田大学の研究と違い、著者はアンケート調査をしていないので、四国遍路を知った経緯や動機に関する統計（%また

³ Shikoku Japan 88 Route Guideという初めて英語版の地図やガイドブックの初版は2007年だった。

⁴ 「お接待の会」の出口勉会長によると、2015年の数字が分かるのは2月下旬ころ。（電話：2015年1月4日）

は、人数）は不明である。

1. 四国遍路を知った経緯

回答は主に3つのカテゴリーに分けられる。

1つ目は口コミ。遍路を体験した外国人が時々母国で講演をしたり、知り合いなどに遍路の体験を伝えることによって遍路情報が普及している。最近、オランダでは「遍路同窓会」が立ち上がり、月に何回か遍路をした人や遍路をしたい人が集まって情報交換をしている⁵。そして、もっと大きな遍路イベントが海外で実施された。2015年2月に「パリ日本文化会館」で遍路のイベントがあり、遍路の研究者や遍路を体験したフランス人が遍路に関する研究や体験について語った。このような企画は初めてだったが、予想を上まわり330人の人が出席した。このようなイベントは2016年の9月にも開催される予定である⁶。

2つ目は、新聞やガイドブック、雑誌、本などの出版物。最近、多くの外国人記者が四国遍路についての記事を母国の新聞等に載せている。例えば、2005年に、あるカナダ人新聞記者が彼の遍路体験記を10回に分けて、カナダの「Ottawa Citizen」という新聞に大きく載せた⁷。また、2014年には、JALのインフライト雑誌「Skyward」に「Shikoku – Temple Pilgrimage」（四国一寺院の巡礼）という記事が載り、四国遍路が「Journey of the Soul」（魂の旅）だというキャッチコピーが使用されている。

3つ目は、ラジオ、テレビ、インターネットなどのメディア。これまで海外の制作会社によって、様々な遍路ドキュメンタリーが作られてきたが、2014年には、海外や日本のメディアによって数多くの特集が世界中に放送された。その一つが、NHKワールドの「Asia This Week」というニュース番組で、四国遍路のことが130か国に紹介された。⁸ また同年12月、アメリカのPBSテレビ局で「Sacred Journeys」（神聖な旅）という巡礼シリーズが放送され、アメリカ全体に四国遍路が紹介された⁹。

2. 人数・国別

外国人遍路の人数を把握するためには、宿坊、おへんろ交流サロン、靈山寺の前にある「門前一番街」店のデータが参考になる。宿坊を経営している安楽寺によると、2011年 - 67人、2012年 - 97人、2013年 - 100人、2014年 - 100人、2015年 - 188人の個人外国人遍路が泊まった。国別で見ると、25%はオランダ人で、次に多い国はフランス（15%）、オーストラリア（10%）、アメリカ（10%）、韓国（7%）（表1）。13番札所大日寺の宿坊にも多くの外国人遍路が泊まっている。そこの外国人宿泊者は、2013年 - 70人、2014年 - 108人、2015年 - 54人。一番多いのは韓国人（41%）で、次いでオランダ（8%）、アメリカ（7%）、オーストラリア（6.5%）、オーストラリア（5%）、フランス（5%）、ドイツ（3%）である。

しかし、全ての外国人遍路が宿坊に泊まるわけではないので、実際に何人の外国人遍路がいるのかを知るために、香川県にあるおへんろ交流サロンのへんろ資料展示見学者数調が大変参考となる。その名簿は4月1日から翌年の3月31日まで計算していて、外国人は2006 - 2007年は74人、2013 - 2014年は160人、そして、2014 - 2015年は404人が交流サロンを訪れている。なんと1年間で、2.5倍の人数となっているのである（表2）。外国人遍路の増加を示すもう一つの資料は、外国人遍路が四国遍路を結願した際におへんろ交流サロンのスタッフが与える称号「遍路大使」のデータである。それによると、2004年 - 0人、2008年 - 44人、2010年 - 78人、2013年 - 98人、2014年 - 129人、2015年 - 184人が「遍路大使」となっており、外国人遍路が急激に増加していることが分かる。国別の数は、アメリカ、フランス、ドイツ、カナダ、オーストラリア、台湾、オランダ、イギリスの順になっている。

靈山寺の前にある「門前一番街」では、その店のスタッフが外国人遍路の客数や国別の調査を2014年6月から行っている。2014年6月1日から2015年12月31日までの合計は480人で、1か月の平均は25人で

⁵ 現在30名のメンバーがいる。メール : Elly Juhrend (2015年12月30日)

⁶ <http://muchujin.jp/archives/6724>

⁷ その内容を「The Way of the 88 Temples – Journey on the Shikoku Pilgrimage」(Robert C. Sibley, University of Virginia Press, 2013) という本にまとめて出版した。

⁸ <https://www.youtube.com/watch?v=zXpFNH1o-HY> (2015年12月15日・確認)

⁹ <https://www.youtube.com/watch?v=FeXFr6pWG7A> (2015年12月15日・確認)

ある。この表を見ると、日本人と同じく、一番多いのは春の3月と秋の10月で、それらの月に約50人の外国人がその店に入っている。一方、オフシーズンの12月～2月には4～8人しかいない（表3）。国別では、一番多い国はアメリカ、次にドイツ、フランス、中国、台湾、カナダ、オーストラリア、韓国である。

3. 男女比率

早稲田大学が行った調査では、女性外国人遍路は4割という結果が出ているが、29人のデータしかなかった。今回は、アメリカ在住のディビット・ターキントン氏と著者の英語版の遍路ガイドブック販売記録や仁庵接待所を訪れた外国人遍路の記録を用いる。ターキントン氏の100名、著者の88名、仁庵接待所の135名のデータ（合計323名）によると、男性が約3分の2（66%）、女性が3分の1（33%）である。

4. 年代別

著者が集めてきた100名の外国人遍路のデータを調べた結果、10代が4%、20代が14%、30代が17%、40代が18%、50代が21%、60代が23%、70代が3%と分かった。20代～40代が49%、50代～70代が47%である。

5. 感想

おへんろ交流サロンのゲストブックにある65名の外国人遍路の感想を調べると、遍路の体験を説明するためによく使われている言葉が分かる。27人が「thankful」（感謝）、20人が「kind(ness)」（親切）、18人が「wonderful」（素晴らしい）、12人が「amazing」（驚異的）、10人が「generosity」（寛大さ）、7人が「beautiful」（美しい）を使っている。また、「adventure」（アドベンチャー）、「friendliness」（好意）「hospitality」（おもてなし）、「unforgettable」（忘れられない）、「highlight of my life」（人生のハイライト）などの言葉も使われている。3人は、「difficult」（難しかった）、「challenge」（チャレンジ）と言っている。

四国遍路の魅力や求めていること

外国人と四国遍路との関わりの歴史は100年にも及んでいることをほとんどの人が知らない。1917年、シカゴ大学の人類学者フレデリック・スター（1858～1933）が、10日間をかけて四国遍路の半分を体験した。その旅を終えた時、彼は八十八ヶ所霊場へのお礼状に、四国遍路の経験が「人生でもっとも面白い経験の一つ」、「私は唯一の一人の巡礼として、また言語や人種においては外国人で、仏教の信者でもないにもかかわらず、旅中親切に接されたことにとても感謝している。永久に忘れられない思い出となった」と書いた¹⁰。1921年にスターが再び四国に来て、四国遍路の八十八ヶ所霊場全てを訪れた。2回の巡礼中、彼は自分の気持ちを表すものを書き残した。金毘羅の学芸館には「Courtesy and Hospitality」（礼儀とおもてなし）という掛物があり、34番札所種間寺には「Peace and International Friendship」（平和と国際友情）という掛物が現在でも飾られている。

その後、1927年にドイツ人のアルフレッド・ボーナーが『Wallfahrt Zu Zweien: Die 88 Heiligen Stätten von Shikoku』（同行二人の遍路：四国八十八ヶ所霊場）を出版した。そこには、彼の遍路体験中のエピソードや歴史などが書かれてある。例えば、お接待文化については、「毎年温かい手が遍路道に沿って展開されており、遍路には食べ物と飲み物、そして他の施し物が随時に振る舞われる。しかしながら、そのことは近代の都会人や日本人には夢想だにし得ないことであろう」¹¹。また、四国遍路には教育的、経済的、宗教的な意義があると強調している。

1930年代、JTB（現在：Japan Tourist Bureau、昔：Japan Travel Bureau）が日本についての様々な観光パンフレットを出版した。その一つが「Touring Japan - Off Beaten Track」（1934年出版）である（図1）。これは当時のJTB常務取締役の講演をまとめたものだが、四国には観光客があまり行かないことが紹介されている。そこには「最近の傾向として、ますます多くの観光客は人がよく行く所以外の自然の美しさ

¹⁰ フレデリック・スターコレクション・アメリカ議会図書館所蔵

¹¹ 『同行二人の遍路』（佐藤）（日本語訳）p15

を求めている」とある¹²。残念ながら四国遍路の記述はないが、栗林公園や屋島の紹介文がある。1934年～1948年に、JTBは「How to see (地名)」という観光案内シリーズを出版した。例えば、How to see Kyoto, Okayama, Ise-Shima, Osaka and Kobe, Yoshino-Kumanoなどがあった。1936年と1947年に「How to see Shikoku」が出版され、表紙にはお遍路さんが載っている。1936版には、「昔から四国は巡礼者の土地として知られ、大師様の八十八ヶ所靈場は未だに保存されている。島の魅力は多くて、多様だ。しかし、それらのほとんどは海外から来た旅行者の注目を集めることができない…日本を訪れるほとんどの外国観光客は観光客がよく行く所以外の面白い名所を常に求めている。」¹³とある。

1955年10月、日本に滞在している米軍のための「Stars & Stripes」(星条新聞)が、2回にわたり四国を大きく紹介した。1955年10月15日の新聞では、「Shikoku: Off the Beaten Tourist Path」(観光客の道から外れた四国)という題名で、善通寺、金刀比羅、松山城などを紹介した(図2)。そこには、四国に長く滞在しても他のアメリカ人を見ないことが可能だ、と書いてある。また、1955年10月31日の記事の題名は「remote and unspoiled island of legend and beauty…Shikoku」(四国：人里離れた自然のままの美しい伝説の島)で、高知県の竹林寺、高松城、金刀比羅などが紹介されている。記者は、「東京に飽きた? 日光や京都での一般的な名所を見ることに疲れた? そうしたら、日本の4つの島の内一番小さくて、一番人が加わっていない四国へ行って…不便な旅行に構わず、日本のあまり知らない魅惑的な所を見たいなら、是非四国へ行ってみて」¹⁴と書いている。(図2) その約20年後の1973年のBoston Globe新聞でも、「Off the beaten track」という表現を使って、四国を含めて西日本を見学してくださいと推薦している。

1983年にアメリカ人の日本研究家オリバー・スタットラーが『Japanese Pilgrimage』を出版し、西洋人が四国遍路について詳しい情報を得ることができるようになった。彼は1968年に初めて四国遍路を経験し、1975年に「四国遍路は生きている宗教。日本に根付いている一般の宗教理念を反映する」と言った。また、1979年には「四国遍路を理解するためには、正しいやり方、要するに徒步でしないといけません」とも言った。スタットラーは1979年～1985年にアメリカ人の学生を「四国遍路巡礼ツアー」に連れて行った。1979年の参加者の一人は次のように語っている。「町、田舎、森林、青々とした渓谷、村、港町を歩くことによって、日本の近代的また伝統的な魅力や住民と出会うことができた。バス、電車、タクシー、またはガイド付きのツアーよりも、歩くことがもっとも親密に日本を体感する方法だと思う。そのおかげで、日本の魂が少し分かったように思う。」¹⁵

2005年以降の聞き取り調査で、著者は、「どうして四国遍路をしたいと思いましたか」、「動機はなんですか」といった質問を数多くの外国人遍路に行った。その結果、次のような回答があった。「仏教に関心がある」、「空海を尊敬する」、「日常生活から脱出したい」、「お接待を経験したい」、「伝統的な日本を見るため」、「人生の転換」、「日本の文化を学ぶため」、「日本の文化でのアドベンチャーをしたい」、「日本の田舎をみたい」など。そして、スタットラーや遍路ツアーに参加した人が言ったように、「人と会い、地元の文化を経験し、訪問している場所を見るためには、歩くことが一番良い方法だと思う。」¹⁶数名の西洋人は、別の巡

¹² The recent tendency is that a growing number of tourists seek the beauties of nature lying outside the beaten track. p1

¹³ From of old, Shikoku has been known as a land of pilgrims, and the 88 temples of Daishi are still preserved…Attractions in the island are many and varied. Yet, most of them have long failed to attract the attention of travelers from abroad…Most of foreign tourists visiting Japan are always seeking places of interest off the so-called tourist channel (p1)

¹⁴ 「Are you fed up with Tokyo? Are you tired of the more conventional sights of Nikko and Kyoto? Then get away to Shikoku, smallest and most unspoiled of the four main islands of Japan…If you do not mind inconvenient travel but wish to see a little known, but fascinating part of Japan, then by all means, try Shikoku.

¹⁵ "Walking through cities, countryside, mountain forests, verdant valleys, inland villages, and coastal towns allows one the opportunity to appreciate and (take) the time to reflect on the modern, as well as the more traditional charms of this country and its people. This is a decidedly more intimate way of experiencing Japan than taking a bus, train, taxi or guided tour. This intimacy gave me a feeling for the soul of Japan."Wayne Nasu著(ハワイ大学オリバーストットラーコレクション所蔵)

¹⁶ "The pilgrim must submerge himself in nature… Going around in a bus or a car may be meritorious, but it is not ascetic exercise and it is not performing the pilgrimage. The pilgrimage goes to the heart of Japanese

礼道、例えばサンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路（カミーノ）を経験した際、四国遍路のことを聞いて四国遍路に挑戦してみたいと思った、と言っている。

また、これまでの調査で、西洋人遍路は主に4つのことを求めていることが明らかになった。それは、日本の歴史や文化と触れ合いたい、長距離を歩きたい、チャレンジかアドベンチャーをしたい、そして、JTBの冊子や英字新聞などに書いてあるキャプションのように、人があまり行かない所に行きたい、の4つである。日本でその4つが当てはまるのは四国遍路だけである。これが四国遍路の大きな魅力であり、そのため世界中で関心が高まっているのだと思う。

今後の変化とその影響

個人だけではなく、外国人遍路巡拝団などのグループも増加している。実は、ハワイからの巡拝団には日本人のバス遍路ツアーと同じような歴史がある。1953年に初めて四国遍路の巡拝ツアーが実施され、それは現在まで続いている。アメリカからは、これまでに主に2つのグループが来日している。1つは、ハワイ・ハレイワ真言宗のグループで、その先達は秋山先生である。彼が初めて連れてきたグループは1961年で、最近では2013年に来日している。もう一つはカリフォルニア州の真言宗の信者たちだ。その先達は米国カリフォルニア州ロサンゼルス市にある高野山米国別院の主監、宮田諦誼で、そのグループも2013年に四国遍路に来た。

海外からの本格的な四国遍路団体バス遍路ツアーが増えているが、最近は観光を兼ねたグループも来るようになっている。その一つの例が、アメリカにあるMountain Hiking Holidaysの「Shikoku Temple Trekking Tour」（四国寺院トレッキングツアー）である¹⁷。その会社のオーナーは2012年に四国ツーリズム創造機構が企画した四国観光ツアーに参加し、四県を見た後、一番魅力のあるものは四国遍路だと気がつき、翌年の春から「ロストジャパンの中にある寺院から寺院へのハイキングツアー」として会社のウェブサイトに載せた。四国遍路の中で一番魅力的な部分が選ばれ、チャーターバスを使用し、良いホテルを使う8日間のツアーで、航空券別で約50万円の料金にもかかわらず、大好評となり、1年先のツアーがもうすでに完売になっている。他の国もそのようなツアーをしようとしているようだ。2015年の9月末に、著者は東京で開かれたVisit Japan Travel & MICE Mart 2015¹⁸に「遍路アドバイザー」として参加し、様々な国の旅行社の代表と会ったが、これから四国遍路ツアーを企画したい国（スイス、フランス、ベルギー、アメリカなど）の多さに驚いた。

しかし、1993年にカミーノが世界遺産になり、ヨーロッパ人は身近にその前後の変化を実感しているので、四国遍路の将来を心配している人も結構いるようである。例えば、2007年にある西洋人が「外国人遍路があまり急に増加すると、遍路道の保存に大きな影響を与えるでしょう…カミーノでは訪れる人数があまりに多いために、道が台無しになって、地元の文化、宗教や環境への尊重が無くなつた。」と言った¹⁹。もう一人の西洋人は、四国に来る人が増えて欲しくないという想いで、「四国を秘蔵の物にして欲しい」²⁰と言う。実は、私の調査では、四国遍路が世界遺産になって欲しくないという西洋人が多い。これは早稲田大学の結果と反しているが、私は2005年、2008年と2013年に聞き取り調査をして、52人の回答を得たが、「NO」の声の方が多かった。しかし、外国人遍路が増加していることは現実であって、止めることができない。2014年以降、様々な市、県、観光協会、寺院、NPOやお接待グループ、宿坊や民宿の経営者が外国人遍路（観光客）への対応・体制の不十分さに気がつき、あせっているようだ。その一つの解決方法として、NPO法人徳島共生塾一歩会が2014年と2015年に「外国人お遍路さんを迎えるおもてなし実践講座」を企画し、著者が外国人遍路の実態や対応のしかたのアドバイスや英語のレッスンを地元の人たちに行った。これまで徳島県内で6回実施し、約350人が参加したが、2016年の2月と3月には観光庁が主催して四国の4県で四国観

religion…The pilgrimage can be understood only by performing it truly; that is … by walking it.” オリバーストットラー著（ハワイ大学オリバーストットラーコレクション所蔵）

¹⁷ http://www.mountainhikingholidays.com/hiking_japan_shikoku_pilgrimage.htm

¹⁸ <http://www.vjtm.jp/>

¹⁹ メール：Jude Quarry 2007年7月30日

²⁰ メール：Joost Bol 2009年12月30日

光関係者研修会を開催した。これからは、このような講座や研修会を開き、受け入れ態勢を整備することが必要であろう。

おわりに

およそ 100 年も前から、外国人は四国遍路に強い魅力を感じており、その魅力の内容（四国の人々の親切さ、お接待の心など）も変わっていないことがはっきりと分かった。この数年間、四国遍路の情報が、様々な言語、様々な方法で、世界中に発信された結果、前述の多くの外国人が自分の求めている 4 つのことが四国遍路にあると分かり、遍路に挑戦している。そして、データによれば、個人だけではなく外国人遍路巡拝団やツアーグループがさらに増加する傾向にある。四国側の準備や受け入れ態勢、また世界への四国遍路の宣伝方法を考えることが今後の課題である。

【参考文献】

日本語

- 浅川泰宏「四国遍路のグローバル化に関する一考察」(『宗教研究』85巻4・p506－507、2012年)
 坂田正顕「グローバル化の中の現代巡礼の変容」(『社会学年誌』50号・早稲田大学・2009年3月)
 坂田正顕「グローバル化と現代巡礼の変容」(『科学研究費助成事業（科学研究費助成金）研究成果報告書』平成25年5月16日) https://kaken.nii.ac.jp/pdf/2012/seika/C-19_1/32689/22530579seika.pdf
 ボーナー・アルフレッド（佐藤久光訳）『同行二人の遍路』(大法輪閣、2012年)
 モートン・ディビット「現代における外国人の目からみた遍路」(『四国遍路と世界の巡礼—アジアの巡礼—・公開シンポジウム・プロシーディングズ』愛媛大学・2005年 p58-64)
 モートン常慈「西洋人の目で見た四国遍路一大正中期から昭和初期まで」—(『四国遍路と世界の巡礼』研究会『巡礼の歴史と現在 四国遍路と世界の巡礼』岩田書院、2013年)

英語

- Japan Travel Bureau. 「How to See Shikoku」(東京、1936年、1947年)
 Japan Travel Bureau. 「Touring Japan - Off Beaten Track」(東京、1934年)
 MacGregor, Fiona. Unpublished MA thesis. "Shikoku Henro: A Study of Japanese and Western pilgrims on the Shikoku Eighty-Eight Sacred Places Pilgrimage" The University of Sheffield, England, 2002
 Nasu, Wayne. Untitled page. 1979 (Oliver Statler Collection, University of Hawaii)
 Stars&Stripes newspaper (星条新聞)。1955年10月15日と31日。
 Statler, Oliver. The Matsuyama University of Commerce Review. Feb 1975 25(6) p. 153-176
 Statler, Oliver. "On Writing about Japan for Foreign Readers: the Pilgrimage to the Eighty-Eight Sacred Places of Shikoku. Personal letter dated 1979. (Oliver Statler Collection, University of Hawaii)

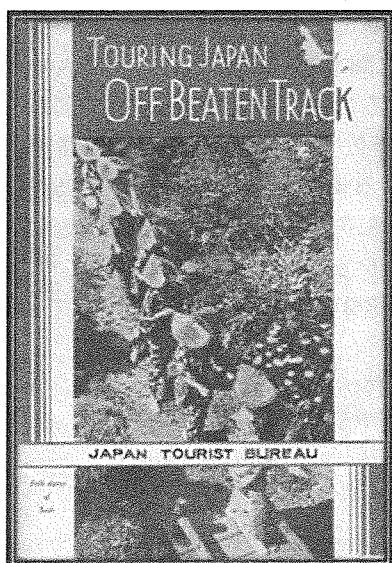


図1 (1934)



図2 (1955)

表 1

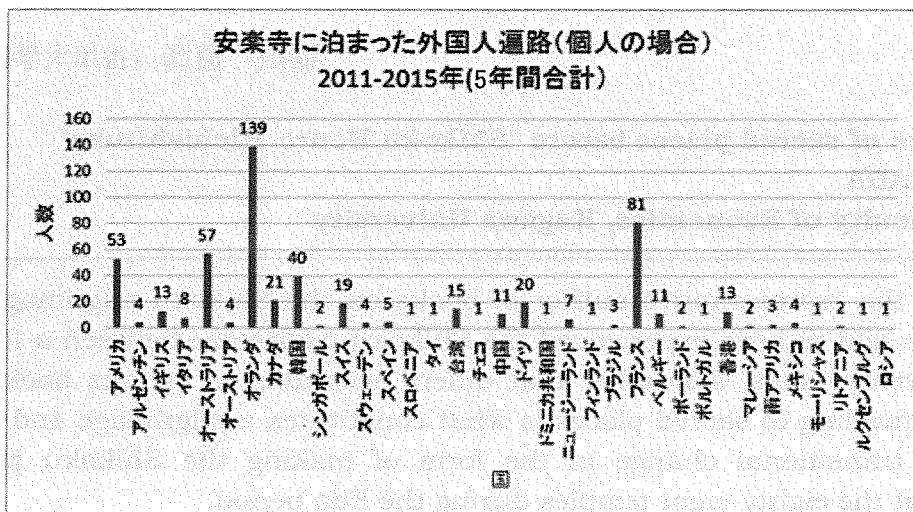


表 2

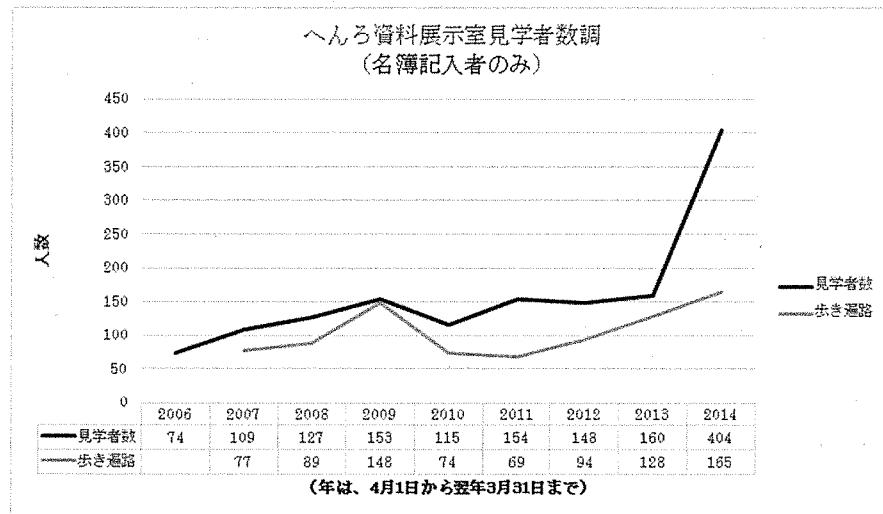


表3 (2015年11月に団体の台湾グループが立ち寄ったため、数字が通常より非常に高い)

